

批評

書評：秦正樹著『陰謀論 民主主義を揺るがすメカニズム』

2022年 中公新書

井川 仁美*

政治学者である秦正樹は、日本にも様々な種類の陰謀論があり、アメリカのように政治的な暴力事件等に発展する可能性があることを指摘する。本書では、現代日本の陰謀論について実証的分析が行われている。具体的には、陰謀論を「重要な出来事の裏では、一般人には見えない力がかかっている」と考える思考様式であると定義（p.6）し、大規模アンケート調査の数々から日本人の「心の中」で陰謀論がどのように受容されているのか、その実態とメカニズムを考察したものである。

本書の概要

第1章「陰謀論の定義——検証可能性の視点から」では、陰謀論の定義はさまざまであることが確認され、その上で秦は本書における陰謀論の定義を先述の通り定める。そして、陰謀論がなぜ社会的問題となるのか、本書における分析手法についての詳細な説明がなされる。本章で秦は、2001名の対象者にアンケートで15の陰謀論言説についての質問を行い、日本人でも陰謀論的言説を「正しい」もしくは「やや正しい」と回答する人が全体的に見ておよそ20～40%であったことを述べている。

第2章「陰謀論とソーシャルメディア」では、現代社会において、ソーシャルメディアが根も葉もない情報が受容される空間を生み出しているのではないかという疑問に迫る。ここで秦が着目するのは、ソーシャルメディアへの接触と陰謀論的信念の関係、「SNS悪玉論」の実態である。特に興味深いのは、ツイッター（＝現X）は陰謀論を蔓延させる「悪いメディア」との一般認識に反して、ツイッターの利用頻度が高い方が、陰謀論的信念が低くなるという結果が得られたことだ。また、ウェブサービス上では現に陰謀論が数多く存在し、信じる人を新たに生み出していることは事実であるが、確率的には稀であることも示唆されている。

次に、第3章「『保守』の陰謀論——『普通の日本人』というレトリック」では、“普通”の政治的意見を持っていると自認する人々が取り上げられ、彼らの陰謀論受容の程度やメカニズムが検証される。本章で特徴的なのは、ネット右翼や、ネット右翼予備軍のような存在を指す「オンライン排外主義者」の一部に、自らの政治的意見こそが「普通」と考える傾向があるとする従来の知見に基づいて論を進めるのではなく、秦は日本の世論全体にも同じ傾向があることを見出し、「普通自認層」と「非普通自認層」で比較を行っているところである。日本に住む1505名の人々に行ったウェブ調査における政治に関する質問では、半数近くの人が「自分の政治的意見は普通だ」と考えていることが明らかになったのである。結果として、「非普通自認層」よりも「普通自認層」の方がネット右翼やオンライン排外主義者と親和的な態度を持っていること、インターネット上の陰謀論的言説を受容していることが示される。

第4章「『リベラル』の陰謀論——政治的少数派がもたらす誤認識」では、一般に注目されづらい左派・リベラル派と陰謀論の関係が問われる。イデオロギー的に左派・リベラル派という特徴を有する日本の野党支持者に言及し、彼らが長い間、選挙で敗北を経験していることに触れる。そして、そのことが選挙制度そのものへの不信感にもつながること、政府批判をめぐる陰謀論的な言説を引き寄せることを指摘する。

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2023年度入学 公共領域

つづいて、第5章『「政治に詳しい人」と陰謀論——『政治をよく知る』は防波堤となるのか?』で問題とされるのは、政治のことをどの程度よく理解しているのかを表す「政治的洗練性」が高い方が陰謀論を受容しないという定説とは反対の見解が、前章までで示されていることである。秦は政治的洗練性の測定に多種多様な方法が提案されていることを踏まえた上で、政治に関するトピックだけでなく質的に異なるさまざまな対象に向ける「関心」すなわち「どの程度注意を払っているか」を示すものの度合いと、正確な政治的知識の多寡という指標から、このズレを検討した。そこで、政治的関心や時事的関心の高い人ほど、陰謀論をより受容しやすい傾向にあること、日常生活に関係するプライベートなことへの関心が高い人は、陰謀論を受容しづらいことを明らかにした。また、アンケート調査によって政治的知識が中程度以上ある人は真偽が定かでない言説を信じる傾向にあるという実態も浮き彫りにされた。本章でなされる指摘は、「過度に」政治への関心を持つことは陰謀論を信じやすくさせるということである。

終章「民主主義は『陰謀論』に耐えられるのか?」では、本書全体の問題意識として、誰が、どんな理由で陰謀論を信じているのかという具体的な実態がほとんど明らかにされず、憶測で決めつける行為が散見されたことが改めて述べられる。また、各章の内容を振り返り、秦は、「誰もが」、「自分のモノの見方を支えてくれているから」(p.217)陰謀論を信じ得るのだと総括する。加えて、「陰謀論から逃れる術」についても議論されるが、具体的な策は示されないまま、「自分の中の正しさを過剰に求めすぎない」(p.231)で、「バランス感覚を持つ」(p.219)という抽象的な提案がなされる。政治的な関心や知識を高めることでかえって、陰謀論を引き寄せてしまうことがなによりも懸念されるためである。

本書の意義・批評

上記でも述べた通り本書は、これまで漠然とした印象に基づいて語られるに過ぎなかった日本社会における陰謀論の実態を統計的に分析することで、特に以下の点において優れた貢献をしたと考える。なによりも、大規模な調査を通じて陰謀論にかんする数々の定説を覆す結果を提示した点である。「ツイッターの利用頻度が高いことと、むしろ陰謀論的信念の低さには関連がある」(p.64)、政治の諸制度に対し、リベラル派が懐疑的な傾向を持つことで、健全な民主主義の維持・発展を阻害しかねない(p.163)、「政治的洗練性の高い人のほうが、陰謀論を信じやすい可能性」(p.170)があるという知見は、人々と各種メディア、政治との関係性の捉え直しを可能にするものでもある。ただ、ツイッターや、人々の政治的関心の度合いに重点が置かれ、検証する対象が限定的であったため、たとえば、動画配信サイトへの接触頻度、歴史的関心の有無、人間関係の良し悪しと陰謀論受容の関係というように、視点を拡大した陰謀論受容のメカニズムの検証も期待したい。

他方、本書を読み進める中で、生じる疑問もあった。ここでは、3点を記述していく。第一に、本書で用いられる陰謀論言説の妥当性である。秦自身、陰謀論と正当な批判の区別が難しいことや、陰謀論は検証が困難であることを念頭に置くが、例として用いる言説が陰謀論と言える理由にはまったく触れていない。そもそもある仮説が検証不可能な場合、即座に「陰謀論」と見なすのは、秦も問題視する「決めつけ」の行為に当たるのではないだろうか。言説の正当性がどの程度なのかを一切検討しないまま本書のテーマを分析することで、陰謀論の受容度を過度に評価している可能性を考慮すべきである。第二に、「政治的関心や知識の高い人ほど陰謀論を受容しやすい」という主張である。本書の成果の1つは、これを実証的に示したことになるが、一般化すれば「様々な情報に触れる機会が多いほど、誤った情報を受け入れる機会も増える」ということであり、このことはSNSの普及によってもたらされるものとして、すでに言われている(東洋大学2021)。日本の陰謀論の実態と受容メカニズムの解明という目的を果たそうとするならば、特定の陰謀論を多くの人が正しいと判断し、信じてしまう過程も実証的に示す必要があるのではないか。言説によって、人々の受容度が異なるというデータがあったことから、プロセスへの言及がほとんどないことは誠実さに欠けるといえよう。そして最後に、終章で示される陰謀論から逃れるための処方箋についてである。本書では高い政治的関心を危険視し、「何事もほどほどに」(p.231)とされるが、特に日本では諸外国に比べ、政治的関心がおしなべて低い傾向にあることに鑑みると、この記述は無責任に響く。陰謀論が民主主義を揺るがすことへの危惧は頷けるが、そのことによって、政治的関心を「ほどほどに」抑えてしまえば、真つ当な政治的判

断が困難となり得るため、最善の処方とは言えないであろう。しかしながら、それに代わる処方箋として安易に情報リテラシーを高める必要性を言うこともできない。真偽判断が難しい情報が氾濫している昨今、単に個人のリテラシーを高めるべきだと主張するだけでは意味がないからである。陰謀論から逃れるための最善の処方を編み出すためにも陰謀論受容に至るメカニズムのより細かなプロセスや条件を検討する必要があるのではないか。「SNSへの接触が陰謀論の受容を促進するわけではない」、「政治的関心が高いことが陰謀論を受容しやすくする」というのは1つの傾向に過ぎず、SNSが契機となり陰謀論の受容に至る例や、政治的関心は高いが陰謀論に接触しても受容に至らない例もあり得る。このような個々の事例分析も追加することで陰謀論の受容にかかる条件や、逃れるための処方が明瞭になるだろう。

とは言え、陰謀論が受け入れられ、広まるメカニズムがデータをもって説得的に描かれていることは確かであり、不確実な情報に溢れたこの時代において価値ある一冊となっている。現代を生きる多くの人に参照を勧めたい。

参考文献

東洋大学, 2021, 「フェイクニュースを生むのは“情報の偏り”? SNS時代のネットに潜む危険を大学教員に聞いた」(小笠原盛浩談)(2024年12月11日閲覧, <https://www.toyo.ac.jp/link-toyo/life/fakenews>)

